

○喜八郎と喜七郎、 それぞれとタイの美術

仏教美術を愛した喜八郎は、日本中国朝鮮のみならず、タイやチベットの仏像を収蔵しました。大正9年(1920)の大倉集古館には、タイの仏像が仏画数点を含め約70点所蔵されており、王族から贈られた仏像も含まれていたようです。そして、チベット仏教美術の約230点とともに当時の日本としては最大の所蔵数と言われました。

時代は降り、嫡子の大倉喜七郎は、ケンブリッジ大学在学中にタイ(当時は暹羅^{シヤム})の王族と同窓であったことなどから、大正13年(1924)、皇太子時代のラーマ7世の来日を接遇、後の昭和2年(1927)にタイを訪問し、叙勲(王冠三等勲章)を受けるなど非常に歓迎されました。この縁で、暹羅協会(現：公益財団法人日本タイ協会)の創設に尽力し財政支援を行っています。タイ訪問では、王族からニエロ細工を施した金工品を寄贈されるとともに、ラーマ7世から委託を受け名古屋の日蓮寺(現：日泰寺^{にったいし})に「釈迦如来坐像」の寄贈を行っています。

「釈迦如来坐像」
タイ ラタナコーシン時代・19～20世紀、日泰寺所蔵
ラーマ7世が大倉喜七郎経由で日泰寺に寄贈した仏像。
この像はランナー様式の蓮弁とスコタイ様式の尊容を示す復古作と考えられる。



「南汎集」
大倉喜七郎編、昭和2年(1927)
漢詩人の国分青庄や土屋竹雨らとともに、喜七郎が帰国後、タイ旅行をテーマに作った漢詩文集。題詞の書は館森鴻、それ以外の書は喜七郎が書を学んだ松本芳翠が担当している。

「銀製ニエロ手箱」
タイ ラタナコーシン時代・20世紀
ラーマ7世からの寄贈品。ポチャーン・スクール製作。



「銀製鍍金ニエロ水鉢」
タイ ラタナコーシン時代・20世紀 トライドス殿下寄贈品。



「宝冠仏立像」
タイ ラタナコーシン時代・19世紀
喜八郎時代の蒐集品。



公益財団法人 大倉文化財団・大倉集古館
TEL:03-5575-5711、FAX:03-5575-5712
〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-10-3
(The Okura Tokyo 前)
<https://www.shukokan.org/>

企画展 合縁奇縁 大倉集古館の多彩な工芸品
2022年8月16日発行
執筆：四宮美帆子(大倉集古館)
デザイン・制作・印刷：株式会社アイワード
編集・発行：大倉集古館

企画展

合縁奇縁

大倉集古館の多彩な工芸品

2022 8.16^火—10.23^日

○大倉美術館・大倉集古館の歴史

大倉集古館のある場所は、江戸時代、松平大和守の上屋敷でした。大倉喜八郎は明治政府から払い下げを受け明治27年(1894)に自邸を建てます。屋敷の前は森に包まれた大きな池があり、猟犬を連れた外国人が鴨打ちの鉄砲音を響かせるような土地でした。その後、明治34年(1901)に美術館部分が完成、翌年明治35年から観覧に供します(開館式は明治36年)。その後、大正6年(1917)に財団法人大倉集古館が誕生します。収蔵品に工芸が含まれることから名称が“美術館”から“集古館”に変更されました。しかし、大正12年(1923)の関東大震災では表門と倉庫を除き、ほとんどが灰燼に帰してしまいます。現在遺る伊東忠太設計の建物が昭和2年(1927)に竣工、その後、昭和37年(1962)にはホテルオークラ開業とともに敷地の整備が行われ、令和元年(2019)のリニューアルを経て現在の形になります。



「大倉邸美術館内之図」
山本昇雲(松谷)画 明治36年(1903)



「大倉美術館(集古館)内部」
大正6年(1917)頃
蔵王権現などの今はなき仏像の展示風景。



「大倉邸之図(含大倉美術館)」
山本昇雲(松谷)画 明治36年(1903)



「大倉美術館(集古館)外観」
大正2年(1913)頃
右端上部に1号館が建ち、噴水も整備された。



「大倉集古館外観」昭和2年(1927)



「大倉集古館外観」昭和2年(1927)
左端には延焼した旧3号館が見える。旧3号館は喜八郎の遺言で震災遺構として遺され、昭和10年頃に解体された。

大倉集古館は、明治35年(1902)に大倉喜八郎が自邸の一部を美術館として公開した大倉美術館を前身とし、大正6年(1917)に日本で最初に財団法人化した、現存最古の私立美術館です。

喜八郎が集めたものは日本・東洋の仏教美術、絵画、工芸品、考古遺物、典籍など広範に及びましたが、大正12年(1923)の関東大震災により所蔵品の多くが災禍に見舞われます。その後、嫡子・喜七郎からの寄贈品を加え、現在の大倉集古館の所蔵品が成り立っています。

喜八郎は当初、廃仏毀釈で被害を受けた仏教美術や、大名家から流出した調度品を中心に西欧への流出を防ぐ目的とともに蒐集を行っていたと考えられます。しかし、明治33年(1900)の義和団の乱を端緒として、西欧から中国へと視点を移し、茶の湯の価値観とは異なる、明治の「東洋憧憬」の最前線を目指したコレクション形成へと舵を切ったと考えられます。そして、その活動は大倉財閥の経済活動とも密接に関わっていました。

令和4年(2022)の本年は、大倉美術館が公開されてから120周年、財団法人大倉集古館の設立から105周年の節目の年です。様々な縁に導かれて集まった工芸品を通して、大倉が東洋へと向けた眼差に追ってみたいと思います。



「大倉鶴彦(喜八郎)像」大正2年(1913)完成



○世界一と謳われた 幻の漆工コレクション

大倉集古館設立当初の目玉の一つが漆工品でした。約 200 点の日本の蒔絵や約 160 点の印籠、約 30 点の各地の螺鈿が所蔵されていました。特に約 150 点の堆朱や堆黄・存星のコレクションが世界一と称されました。しかし、関東大震災において、8 点を残しほとんどが灰燼に帰してしまいます。現在の所蔵品は、大倉家から後に寄贈されたものが中心となっており、向島の別邸にあったと考えられる作品も含まれます。向島別邸の迎賓館・蔵春閣(新潟県新発田市に移築)には奉天軍閥の総帥・張作霖から贈られた螺鈿細工の戸棚があり、現在大倉集古館に所蔵されている中国清代の螺鈿細工の中には同じ出自の作品が含まれている可能性があります。



「堆黄八花式陥地紅錦萱草文大盆」
中国 明時代、端方旧蔵
焼失した作品。



重要美術品「唐草文螺鈿手箱」朝鮮 高麗時代・13 世紀
災禍を免れた作品。



「乾隆堆朱円形雲龍文大菜盒」
中国 清時代、旧清室宮中什器
焼失した作品。

○大倉財閥ゆかりの刀剣

政商として知られた大倉は、軍部との繋がりから、折にふれ刀剣の寄贈をうけています。明治元年(1868)、喜八郎は、時の東征大総督であった有栖川宮9代熾仁親王より、官軍の兵器から食料一切の調達を命じられます。それ以降、2代喜七郎の代になるまで公私ともに有栖川宮家との関係が続きました。10代熾仁親王お抱え刀工の桜井正次の短刀は、熾仁親王とドライブ仲間でもあった喜七郎への寄贈品です。その他、月山貞一(初代)の太刀は、大坂衛戍司令官陸軍中將であった小川又次からの寄贈品であり、日置兼次の剣は、70歳の古稀祝賀会に贈られたもので、やはり軍人からの寄贈品と考えられます。

また、大倉は明治44年(1911)満州で日中合弁企業、本溪湖煤鉄公司を設立します。昭和6年(1931)の満州事変後は、軍需用の高級低燐銃鉄生産で財を成しますが、昭和9年(1934)頃から特許を取得した特殊鋼製作の原料である海綿鉄(スポンジ鉄)を使った軍刀の製作に乗り出します。その際、靖國神社内の日本刀鍛錬会にいた宮口靖廣(壽廣)と、独学で刀工となった秋田の柴田果の2人を中心に製作の依頼をします。後の昭和11年(1936)には喜七郎の自邸内に大倉鍛錬所を開設し、当時日本刀鍛錬会にいた宮口靖廣(壽廣)・酒井繁政・武田定吉が移籍します。大倉鍛錬所の資料は残されていませんが、現存作品から大倉が良質の玉鋼に匹敵する良材として海綿鉄を用い、実用だけでなく鑑賞性の高い軍刀製作に情熱を傾けた事実を知ることができます。

- 1 「刀 銘 以本溪湖高純鉄 果(花押)／皇紀二千六百参季十月吉日」
柴田果作、昭和18年(1943)
- 2 「短刀 銘 舞子有栖川宮於御庭前正次作／明治四十三年」
桜井正次作、明治43年(1910)
- 3 「剣 銘 明治三十九年十月吉日兼先十二代孫兼次謹造之／祝大倉君高齡」
日置兼次作、明治39年(1906年)

左から 李垠
有栖川宮熾仁親王
伊藤博文
大倉喜七郎
明治41年8月(1908)



○日本における最初期の陶俑蒐集

大正6年(1917)、財団法人大倉集古館設立の際、所蔵品の特色の一つとして挙げられたのが、中国の墓磚や陶俑の存在です。陶俑については約124点収蔵されていましたが、残念ながら、関東大震災においてすべてが被災し、現在遺っているものは、後に収蔵した1点を含め43点となり、修理がなされているものの痛ましい姿となっています。蒐集品の傾向は、京都帝国大学総長で考古学者の濱田耕作や、東洋史研究者の内藤虎次郎(湖南)らによって蒐集され、明治43年(1910)に京都大学文学部考古学陳列室の標本として納められた洛陽出土の唐時代の陶俑と同傾向の作風です。

また、本展では、中野欽九郎、横河民輔ら日本の陶俑蒐集の流れを概観する上で重要な人物によって東京国立博物館に寄贈された作品も展示します。

中野欽九郎は実兄太田六郎と土木請負業を始めた人物で、工学士である六郎は大倉組(大成建設の前身)に所属した経歴があり、大倉喜八郎とも面識があったようです。六郎の養父資政は、長崎訳官として数か国語に通じ、大久保利通に従って中国に行った後、鉄道権頭に任じられた経歴があり、六郎とともに清朝の珍器翰墨に心酔し、その蒐集で知られています。このことから、欽九郎が明治44年(1911)に寄贈したものは兄の遺品とも考えられます。

もう一人の横河民輔は、帝国劇場の設計者として知られますが、帝国劇場創立の中心人物である大倉喜八郎とともに西洋式演劇場の基礎を築いた人物と言えます。横河は世界的な東洋陶磁のコレクターであり、自らの所蔵品を大倉美術館に寄贈しようと考えていた時期もあったとされ、喜八郎とはコレクターとしての交流もあったと考えられます。明治期における建築業界内でのコレクターの繋がりを知ることができます。



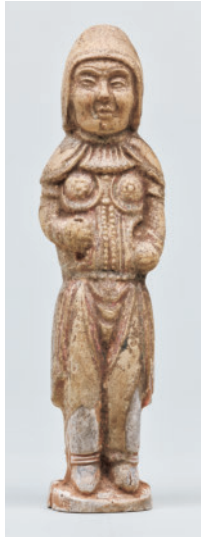
「加彩女子(首部)」
中国 前漢時代・前2世紀
収蔵品で唯一の漢代の作品。



「三彩馬」
中国 唐時代・7～8世紀、横河民輔氏旧蔵、東京国立博物館所蔵
Image: TNM Image Archives



「白釉女子」
中国 唐時代・7～8世紀
火災の灰が自然釉となったもの。



「加彩武人」
中国 唐時代・7世紀、
中野欽九郎氏旧蔵、東京国立博物館所蔵
Image: TNM Image Archives

○清朝の染織

「対支事業の雄」と称された大倉喜八郎は中国に対して多くの投資や借款を行い、宣統帝(愛新覺羅溥儀)や、肅親王(愛新覺羅善耆)、内蒙古の奈曼王(蘇珠克圖巴圖爾)ら清朝皇帝や親王・群王と関わり、9度の中国旅行も果たしました。その縁で寄贈されたと考えられるもの、またコレクションとして持ち帰ったと考えられる清朝の吉服や甲冑、女性用の便服(普段着)など数点が大倉集古館には所蔵されています。

美しい藍の装束は、中国・清朝の典礼に着用する吉服です。皇帝が着るものは「龍袍」、官吏が着用したものを「蟒袍」といいます。龍も蟒(大蛇)も模様の上では同じ龍ですが、衣の色や爪の数などで位の差を表します。当館のものは皇子や皇族、上級官吏が着用した9尾5爪の龍がいる「蟒袍」であると考えられ、そのうち1領は、光緒帝の時期のもので考えられます。

また、「蒙古の鎧」と称される清朝甲冑は、綿襖甲と呼ばれる生地の中に鉄の小札を仕込んだ鎧です。大倉集古館には綿襖甲が2領、綿襖甲ではありませんが金属の飾りのついた豪華な鎧も1領、兜は2頭所蔵されています。鎧はいずれも金糸で龍の刺繍を施す儀式用の甲冑であると考えられます。鉄砲商として知られた喜八郎は、日本のみならず各国の武具もコレクションしていました。



「蟒袍」中国 清時代・19世紀 光緒帝期のもの。



「蒙古の鎧」(部分)
中国 清時代・19世紀